

2. A群とC群では, Epinephrine の S-S, 自然凝集の S-max, S-S, TでC群が高値を示したが, Epinephrine の TではA群の方が高値であった.
3. B群とC群では Epinephrine のT, ADP のL-max, TでB群の方が高かったが, Epinephrine の S-S ではC群の方が高値を示した.

は手術成績の向上に寄与する可能性があると思われた. また下垂体前葉予備能が低下している患者には改善が期待でき, 手術による下垂体機能低下の発生を防止できる可能性があると思われ, invasive large adenoma でも使用する価値があると思われた. 副作用として1例に一過性の下痢を認めた. 至適投与量や方法については今後の検討を要する.

II. 特 別 講 演

『ASO をめぐる最近の知見』

神戸大学医学部第二外科教授
岡 田 昌 義 先生

- 3) 少量の CB 154 療法が著効を示し, 正常の妊娠, 分娩を経験したクッシング病の1例 (統報)

金子 兼三 (長岡赤十字病院 内科)
山田 潔・須藤 寛人 (同 産婦人科)

症例は28才, 女性. 少量の CB 154 療法が著効を示したクッシング病で, 第56回 (平 3. 11.) の本会で報告した症例の統報である. 平 3. 6. より CB 154 0.625 mg/日の少量投与を継続しているが, 副作用はなく, 血中 ACTH, コルチゾール, 尿 17 OHCS, 17 KS は常に正常域に抑制されていた. 平 5. 7. 妊娠成立. 妊娠後も陣痛開始まで CB 154 の投与を継続したが, 妊娠の経過は順調で, コルチゾール (10.00 前後の値) が 10.0~24.2 $\mu\text{g}/\text{dl}$ と妊娠前に比し若干上昇傾向を示したほかは, ACTH, 尿遊離コルチゾール, 尿 17 OHCS はいずれも正常域のまま経過した. 平 6. 4. 27 に 3,555 g の健常男児を正常分娩した. 分娩後 CB 154 療法再開したが, 分娩5日後の PRL 79 ng/ml で少量の乳汁分泌も認められた. 生後3日目の児の朝の ACTH 33.5 pg/ml, コルチゾール 9.0 $\mu\text{g}/\text{dl}$ と正常域で, その後の発育も正常である. (結論) CB 154 療法は副作用が少く, 女性では妊娠も可能で, クッシング病で最初に試みるべき治療法の1つと考えられる.

第62回新潟内分泌代謝同好会

日 時 平成 6 年 9 月 3 日 (土)
午後 2 時
会 場 新潟ワシントンホテル
4 階 大和の東の間

I. 一 般 演 題

- 1) メルカゾールによる無顆粒球症に G-CSF が有効であった Graves' disease の1例
齊藤 功・太田 隆志 (木戸病院内科)
浜 齊

- 2) 末端肥大症に対する術前 octreotide 治療の有用性

田村 哲郎・岡崎 秀子 (新潟大学脳研究所)
田中 隆一 (脳神経外科)

末端肥大症の手術成績は microadenoma はともかく macroadenoma では必ずしもよくないので, ソマトスタチンアナログである octreotide で前治療を行い, その有用性を検討した. 対象は手術単独では正常化困難と思われた本症患者 4 例 (男 1 女 3, 年齢 28~60 歳) で octreotide を 135 $\mu\text{g}/\text{日}$, 12 回分割皮下注より開始し, 適宜増減した. その結果腫瘍の縮小は 3 例に多少なりとも認められたが, 海綿静脈洞浸潤があった 3 例の GH は正常化せず後療法を必要とした. 1 例の expansive adenoma では正常化し大きな expansive adenoma で

- 4) Glucokinase 遺伝子 5' 上流での遺伝的多型性

山崎 雅俊・羽入 修
伊藤 正毅
他内分泌班一同 (新潟大学第一内科)

【目的】近年, MODY において Glucokinase 遺伝子の異常が発見され, 糖尿病疾患感受性遺伝子の1つとして注目されているが, この遺伝子近傍での遺伝的多型性を検索することにより, 遺伝子異常のスクリーニングが